
真・恋姫＋無双～胡蝶の夢～

249

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜胡蝶の夢〜

【コード】

N3685K

【作者名】

249

【あらすじ】

どうも、249です。突然ですが、モバゲーで書いていた小説をこっちで書きます。

なお、モバゲーからのお越しの人は文章の書き方とストーリーが変わっていますが主人公と大まかな物は変わりませんので予めご了承ください。

それでは真・恋姫十無双〜胡蝶の夢〜開幕です。

0、蝶と夢と日常と

俺は何者だ？

どうして俺には親が居ない？

どうして俺は周りから疎まれ、迫害される

どうして俺は一人なんだ？

どうして……………。

どうして俺にはこんな力があるんだ？

—————

「うつ……………。朝か……………」

カーテンからこぼれる朝日を浴び少年は目を覚ました。

「また、あの夢か」

少年は起き上がり、今さっき見た夢を思い出し顔を歪めた。

「見たくもないのに最近多いな、くそっ！」

そう吐き捨て少年はベッドから降り、部屋を出た。

少年の名前は白井 胡蝶。聖フランチェスカ学園の高等部2年生だ。だが、胡蝶はある理由で今は不登校である。

胡蝶は部屋を出て、一階のキッチンに向かい冷蔵庫を見た。

「あるのは卵に牛肉、野菜が少しにパンか。はあ、買い出しに行かないといけないか」

そう言つて冷蔵庫の食材を出して料理をし始めた。

そんな時、ふと玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

料理を止め胡蝶は玄関のドアを開けるとそこには白い制服を着た少年がいた。

「よお、胡蝶。元気〜」

「なんだ、おまえか一刀」

胡蝶は少年・北郷 一刀を見て溜め息を吐く。

一刀は胡蝶の唯一の友人で、昔から良く一緒にいた胡蝶の掛け替えない友人だ。

だから、昔から一緒にいた一刀の考える事は良く解る。

「飯は遣らんぞ」

「ひどっ！？それが朝早く着た親友に最初に言う言葉か」

「うるさい、バカズト。俺の事を少しは考えろ」

胡蝶は一刀に言うが、一刀は消えていて一刀の靴が玄関に置いてあった。

「おお！もう飯作ってんじゃん」

キッチンから聞こえた一刀の声に、胡蝶は後ろから黒い気を出し始めた。

「一刀……………」

胡蝶は怒気の籠もった声で一刀を呼んだ。

バチッ！！

「バチッ？あれ、胡蝶……………」

一刀は胡蝶の怒気の籠もった声と急に聞こえた音に気づき玄関を覗くと、そこには体中に電気を放っている胡蝶がいた。

「一刀」

「は、はいっ！…！」

一刀は胡蝶の前で敬礼して固まった。

そして胡蝶は電気を出しながら一刀に近づいた。

「一刀。俺、言ったよな少しは俺の事も考えろって」

「はいっ、言いました!」

「なら、つまみ食いはいけないよな」

胡蝶は一刀の間近に行つて物凄い笑顔で一刀を見た。

だがその笑顔は目が笑つておらず電気も出たままだ。

「これはお仕置きが必要だな」

「待て、胡蝶! 落ち着け、話せば解る」

「問答無用!」

胡蝶はそう言つて一刀の後ろに回り、両腕を掴み、一刀の上に乗つて腕を極めた。

「痛い、痛い!! 胡蝶、パロ・スペシャルは痛いつて……ぎああああああ!!」

腕を極められ一刀は断末魔をあげた。

これが、胡蝶の最後の日常である。

1、蝶とレポートと紫色の光（前書き）

あ〜。まだこっち慣れてねえ〜。

てっことで短いですがどうぞ。

1、蝶とレポートと紫色の光

一刀をお仕置きした後、一刀に泣きつかれた胡蝶はしゅしゅ一刀の分の朝ご飯も作り食べていた。

「なあ、胡蝶」

「なんだよ。朝ご飯作ってもらってまた頼み事か」

胡蝶の問いに一刀はビクついた。

「当たりか……………」

胡蝶は呆れて溜め息を吐いた。

「頼む、胡蝶。世界史のレポートを手伝ってくれ!」

「は、レポート?」

一刀のいきなりの発言に胡蝶は驚いた。

それで、一刀から聞くとうちの学園の世界史教師が明日までにレポートを提出しないとイケないらしい。

「それで課題は三国志か戦国時代って、なんだよこの課題」

「仕方ねえよ。女子勢が戦国時代が良いって、ほら最近、歴女多いから」

「だからか」

胡蝶は前にゲームから戦国時代を好きになる女子通称、歴女が増えたと言うニュースを思い出した。

「それで、一刀はどっちをやるんだ」

「そうだよ、そこから始めないと」

まだ決めてないらしく一刀は考え出した。

そこらかよと、胡蝶はまた溜め息を吐いて、一刀に言った。

「なあ、後で学園の歴史博物館に行くか。そこで調べれば、まあ大丈夫だろう」

そう言うと一刀が涙目になった。

「胡蝶〜。ありがとう!!」

抱きつこうとする一刀を胡蝶はすかさず避けた。

そして一刀は床に顔面から着地した。

「へぶっ!!」

「まったく、何抱きつこうとするんだよ。生憎俺はそういう趣味はねえぞ」

「ひ、酷い。酷いわ!!」

一刀は昼ドラとかでいるヒステリックな女の真似をしながら言った。

胡蝶はそれを見るや否や手を一刀に向けた。

「えっ、胡蝶……」

「いい加減に……」

胡蝶はこめかみに青筋を浮かべて一刀を睨んだ。

バチッ！！

そして手からは、淡い紫色の光が現れた。

そして、光は徐々に強く光り出した。

「しろおおお！！」

胡蝶は叫びながら紫色の光を一刀に放った。

「ぎいやあああああ！！」

光に当たり一刀は叫んだ。

そして、しばらくして一刀は黒こげになってしまった。

「し、痺れる……」

「少しは反省しろ。おまえのレポートを手伝ってやるんだからぶぎけるな」

「はい、反省しま……す」

黒こげの一刀は痺れながら言ったが、ガクツ！と言って気絶した。

それを見て、はぁ……。と溜め息を吐き胡蝶は一刀をソファアに運び、横にした。

一刀は夕方になるまで起きなかった。

1、蝶とレポートと紫色の光（後書き）

249「あ~~~~~！」

胡蝶「どうした、ムンクさながらの叫びをして」

249「短い！短過ぎる！やっぱりまだこっち慣れてない」

胡蝶「確かに短いが仕方ないだろ。まだ日が浅いんだから」

249「胡蝶~~~~~」

胡蝶「やらせるか」

バチツ！！

249「ぎいやあああああ！！ひ、酷い……………ガクッ」

249は黒こげに成った。

胡蝶は249を倒した。

胡蝶はレベルアップした。

249は（次回・蝶とキャラ紹介と鋼鉄との座談会）のカンペを落とした。

胡蝶「次回予告!?!」

249 「それでは」*。
。
ノ
ノ
」

2、蝶とキャラ紹介と座談会（前書き）

今回は番外編とキャラ紹介です。

そして、この話しは249の別小説・魔法少女リリカルなのは〜鋼鉄の仮面〜とJAMさんの魔法少女リリカルなのはStriker S〜Material S〜がクロスされています。よろしければそちらも呼んで下さい。

それでは、始めます。

2、蝶とキャラ紹介と座談会

249「皆さん。胡蝶の夢お楽しみにして下さってますか。作者の249です」

胡蝶「皆さん、まだ序盤ですがこれからも読んで下さい。主人公の胡蝶です」

249「いや〜。胡蝶の夢ついに再開したね」

胡蝶「ああ、おまえのスランプとモバゲーの恋姫狩り。色々合ったからな」

249「うっ、スランプは触れないで」

胡蝶「と言うかこれ、蝶とキャラ紹介と座談会だったな。キャラ紹介は解るが座談会は何でやるんだ？」

249「えっ、やりたかったから」

胡蝶「ズルッ！（転けました）」

249「だって、座談会書いて楽しいじゃん。カオスやりたいじゃん」

胡蝶「カオスって……。てか、今回はゲストと陽達が着てるんだろ」

249「はっ！?!?」口（忘れてた」

胡蝶「忘れてるのかよ!!」

249「うんにゃ、嘘。って事で今日の座談会の参加者、一刀と魔法少女リリカルなのは、鋼鉄の仮面から長瀬 陽とフェイト・テスタロッサ。魔法少女リリカルなのはStrikerS、Material Sから星光の織滅者さんです」

陽「よお、馬鹿作者」

フェイト（省略フェ）「陽!!作者さんに失礼だよ」

星光の織滅者（省略星光）「初めまして星光の織滅者です……………」。
あの……………」

一刀「君、星光の織滅者って名前なんだね。僕は北郷 一刀、ねえ、これが終わったらお茶しに……………」

胡蝶「やらせるかあ!!」

胡蝶は一刀に飛び蹴りを喰らわせた。

一刀「ぐわあああああ!!」

一刀は喰らったまま動かなくなった。まるで屍のようだ。

星光「えっ、あ、あの……………大丈夫、ですか?」

胡蝶「星光さん、ほっといいていいですよ。どうせ後で蘇りますから」

249「……………。さあ、胡蝶のライダーキックを見た所で胡蝶と一刀の紹介しまゝす。後、この紹介はモバゲーでの小説の設定を若干

変えました。一応ネタばれありなので見たく無い方はスルーして下さい」

白井 胡蝶

178cm

62kg

胡蝶の夢の主人公。聖フランチエスカ学園の高等部二年生だが、自分の異能で今は不登校。今は他界している父の遺品、S&Amp;W・蝶と薔薇を大切にしている銃の腕もかなりの物

生活

他人には一つ距離を取って接するが友人（今は一刀と及川ぐらい）には心を開いている。

本当は優しく寂しがり屋だが、少し生真面目で、一刀のポケには手厳しく当たる、だが、なんやかんやでそれも心を開いている証拠である。

容姿

最大の特徴は綺麗に伸びた金髪とサファイアのような瞳、そして女顔。

遠目で見ると外国のモデルだと勘違いされるぐらい綺麗で、この先この容姿が不幸を呼ぶ!?かも。北郷 一刀

恋姫の主人公。本作と違い馬鹿でお調子者になっているが、人を思い優しく接する所は変わりません。

また、本作と違い戦える設定で、腕はある意味最強クラス。

249「まあ、こんなもんか。ずずず………（お茶を飲んでる）」

フェ「胡蝶さん、異能ってなんですか？」

胡蝶「ああ、ごめんねフェイトちゃん。異能はまだ秘密でね、もう少ししたら解るからそれまで待ってて」

249・一刀「けど、使ったじゃん」

胡蝶「ほお〜。おまえ達はまた喰らいたいか」

バチツ！！

249「えっ、待って。今日は座談会だよ、黒こげ沙汰は良くないよ」

一刀「そ、そうだぞ胡蝶。それは止めよう、陽君達いるから」

胡蝶「うるさいー!!」

249・一刀「ぎいやあああああすー!!」

一方、陽達は………。

星光「賑やかですね。長瀬 陽、フェイト・テスタロッサいつもこんな感じですか？」

陽「ああ、馬鹿作者はいつもだが、一刀さんは知らねえ。てか初めだし」

フェ「そうなんだ。ねえ、星光さん」

星光「なんですか？」

フェ「さっきから星光さんのデバイスが光ってますよ」

星光「えっ」

ルシフェリオン（省略ルシ）『マイロード！酷いですよ。さっきから呼んでいるのに無視なんて』

星光「すみません、ルシフェリオン。少し和んでました」

陽「おっ！出たな、マイロードラブデバイス！」

ルシ『あなたは、料理上手な不良！』

フェ「ルシフェリオン。それ、けなしてるの？」

星光「とつかどうかどうしましたルシフェリオン。私を読んだと言つことは何かあつたんですか？」

ルシ『あ！忘れてました。マイロード、逃げて下さい！ここにあなたを狙う害虫がいます！』

星光「害虫……ですか？」

フェ「星光さんを狙うって、まさか一刀さん？」

陽「おい、それ一刀さんの事、害虫って言ってる事だぞそれ」

胡蝶「ふうう、お仕置き完了。ん、どうした、みんな？」

胡蝶が帰って来た瞬間……………。

ルシ『来ましたね、マイロードに付こうとしてる害虫！…』

星光・陽・フェ「…………ええ…………！？胡蝶さんの事」「」

胡蝶「は？」

ルシ『本編であんなにここに害虫が居るとは……………。マイロード、今すぐルシフェリオン・ブレイカーをあの害虫に撃つて下さい』

星光「ルシフェリオン、何故、胡蝶さんが害虫…………、なんでしか？」

ルシ『なんでって、それは、あの害虫からマイロードを狙う雌の臭いがするからです！…！』

星光・陽・フェ「…………胡蝶さんから雌の臭い！？」」「」

胡蝶「雌……………」

陽「おい、ルシフェリオンよお」

ルシ『なんですか』

陽「一つ聞くがおまえ、胡蝶さんをまさか女だと勘違いしてないか？」

ルシ『なんの事です？彼女はれっきとした女性では無いですか』

胡蝶「ぐはっ！！」

胡蝶は心にルシフェリオン・ブレイカーを受けた。

星光「ルシフェリオン。胡蝶さんは女顔ですが、れっきとした男性です」

ルシ『えっ！？本当ですかマイロード』

星光「本当です」

星光から聞いてルシフェリオンは胡蝶を見ると、隅で体育座りをしていた。

胡蝶「ああ……。また、間違われた……。そう言えば、前におっさんにラブホに連れて行かれたな……。あはははは……」

陽「落ちたな」

フェ「ねえ、ハル。ラブホってなに？」

陽「聞くな。デカくなったらヤでもしるから」

陽は胡蝶の話しを聞いて涙を流している。

249「ソロモンよ、私は帰って来た!!」

一刀「俺、再び参上!!」

すると、胡蝶にお仕置きされた馬鹿二人が帰ってきた。

フェ「あつ、作者さんと一刀さん」

一刀「ん、どったのフェイトちゃん……………て、なんで胡蝶落ちてんの」

星光「それが……………」

星光さんがここまでの説明を二人にした。

一刀「ああ、だから胡蝶おちてるの」

星光「すみません。ルシフェリオンが解らないとわ言え胡蝶さんを傷つけて」

一刀「いいよ、気にしないで。いつもの事だから」

陽「いつもってこんな事しょっちゅうなんですか!?!」

一刀「ああそうだよ。胡蝶綺麗だから良くナンパされるし、化粧品
のサンプル渡されるし」

陽「は、はあ。胡蝶さんガンバ……………」

249「いや〜。だけどここまで落ちるとは、あっち飛んだらどうなるんだ?」

星光「あっち？あっちとはどこの事ですか？」

249「あつ、星光さん知らないんだ。だけど、あっちはこれから話が進んだら解るから今は秘密なり」

フェ「作者さん、作者さん」

249「ん、どつたのフェイトや」

フェ「えくと、スタッフさんがもう時間だつて」

249「もう時間か……。長いようで短かつたね」

陽「ああ、そうだな。星光さんはいかがでしたか」

星光「ええ、とても楽しめました」

ルシ「そうですね。けど、胡蝶さんは……」

一刀「胡蝶、もう終わるぜ」

胡蝶「あはははは……。俺は……。俺は……」

ルシ「ああ……」

249「うん、胡蝶はほつといてみんなであれで締めるか」

陽「あれか」

フェ「あれ、私やった事ないからやってみたい」

249「そうかい、そうかい。星光さん達もやりますか？」

星光「えっ！？えっと、じゃあ……………」

ルシ『マイロードがやるなら私も』

249「そんじゃやるか」

249・陽・フェ・星光・ルシ「……………」それでは（*。 。 ノノ

ゝ
『…………』

一刀「胡蝶〜」

胡蝶「はあ……………」

3、蝶と雷と銅鏡と

一刀を気絶させた後、胡蝶は買い出しをして晩ご飯の準備をした。

今日の晩ご飯は胡蝶の得意料理・カレーである。

「……………。よし、なかなか良い出来だ」

カレーを味見して胡蝶は出来を確認した。

「ん……………。良い匂い」

すると、気絶していた一刀がカレーの匂いで起きた。

「起きたか、一刀」

「今、何時？」

「今か？今は7時ぐらいだな」

一刀は時間を聞いて一瞬にして青ざめた。

「7時……………門限。うわあああああ！！」

「うるさい！一刀、たかが寮の門限で騒ぐな」

騒ぐ一刀を胡蝶はカレーをかき混ぜながらたしなめた。

「一刀は学園から家が遠い為、今は寮で暮らしている。」

ただ、その寮の寮長が厳しく門限があり、それを破ると鉄拳制裁があるらしい。

「こ、ここ胡蝶！俺、死ぬ！寮長に殺される！！」

「良いんじゃないか、一回自分の生涯を振り返るのも」

「胡蝶~~~~~」

胡蝶に見離され一刀はソファでうなだれた。

「そう病むな。ほら、おまえの好きなカレーだぞ」

「カレー！！」

胡蝶の言葉に一刀は光の速さでテーブルに着いた。

「相変わらず現金だな」

「そんな事よりカレー、カレー」

「一刀は子供ようにはしゃいでカレーを要求する。」

それを見て胡蝶はため息を吐いてカレーをテーブルに置いた。

「わぁーい！それじゃあいただきまーす！」

「いただきます」

二人はいただきますをしてカレーを食べ始めた。

「うまい！やっぱり胡蝶のカレーは最高！！」

「お粗末様。そうだ、一刀。後で歴史博物館行くか」

「今から？」

「ああ。幸い、あそこの警備員は間抜けだからいけるだろ」

胡蝶はそう言っでカレーをまた食べ始めた。

そして、カレーを食べ終えた二人は学園の歴史博物館に向かった。

—————

「なあ、一体どう忍び込むんだ？」

学園の裏口に着一いて一刀は胡蝶に聞いた。

「何、あいつらは見回りと云う名の散歩をしてるから、ここまで目が届かない」

そう言っで胡蝶は裏口のドアノブに手を掛けると裏口は開いた。

「ほらな」

「凄いけど、なんで胡蝶はそれを知ってるの？」

「前に、一回やったから」

そう言い残し胡蝶は学園に入った。

「って、置いていくな」

一刀も胡蝶に続いて学園に入る。

学園に入ると二人は警備員に見つからないように歴史博物館に向かう。

歴史博物館を向かう途中、ふと一刀は胡蝶に言った。

「なあ、胡蝶」

「なんだ」

「おまえ、いつまで不登校をする気だ」

「……………!!」

それを言われた胡蝶は、少しだが動揺した。

「おまえが不登校になった理由は知ってる。けど、そのまま不登校を続けたら……………」

「大丈夫だ」

「えっ？」

一刀の言葉を遮るように胡蝶は言った。

「俺は行っても、行かなくても拒絶されてる。なら拒絶する奴らが居る場所に行きたくない」

「胡蝶……………」

「それに、俺にはおまえが居るだから寂しくはない」

そう言つて胡蝶は歴史博物館に急いだ。

「胡蝶……………、大丈夫。俺はおまえを寂しくさせないから」

一刀は胡蝶に聞こえないように言つてまた胡蝶を追い掛けた。

—————

しばらくして胡蝶達は歴史博物館に着いた。

「やっと、着いた」

「そんな言つほど歩いてないだろ。無駄口叩かないで早く行くぞ」

胡蝶達は喋りながら歴史博物館に入った。

歴史博物館に入ると中暗く何も見えなかった。

「やっぱり暗くて見えない」

一刀は愚痴ると胡蝶は左手を出し力を込めた。

バチッ！

すると、右手から淡い紫色の光を放ち始めた。

「ほら、これで見えるだろ」

「ありがとう、胡蝶。いや、胡蝶の力は色々使い道あるな」

「これはただ雷を出してるだけだ。それにこの力で俺は拒絶される」

胡蝶の力。それは、発電能力である。

胡蝶は自分の意思で雷を出す事が出来る。

この発電能力は生まれた時からあり、そのせいで周りの人から拒絶されている。

「ごめん、そうだった」

「気にするな。それより早く済ませるぞ」

そう言つて胡蝶達は歴史博物館にある三国志ブースに向かおうとした時、前から誰かの足音がした。

「！？なんだ」

胡蝶は直ぐさ雷の光を前方に放つた。

そして少しすると、前から学園の制服を着た少年が現れた。

「くっ！まさか見つかるとは、貴様何者だ！！」

「何者だっっておまえこそこんな時間に何の用だ」

「まさか、俺達と同じ用事？」

「それは無いだろ。ん？」

胡蝶はふと少年からチカチカと光が見えた。

見ると少年は今の時代に不釣り合いな銅鏡を持っていた。

「銅鏡？まさか、盗んだのか」

「ふっ、貴様には関係ない！！」

少年は胡蝶の懐に一瞬にして入り、中段蹴りを放った。

「なっ！？」

胡蝶は驚いたがなんとか蹴りを避けた。

「ほう、正史の奴にしてはやるな。それに、普通とは違う力があるんだな」

「正史？おまえ何を言っている」

「さっきも言っただろ貴様には関係ない！！」

少年は中国拳法のような攻撃を仕掛けてて胡蝶を翻弄する。

「止める!!」

すると、一刀が少年の顔面を殴った。

「ぐあっ!!」

少年は殴られた衝撃で倒れた。

「大丈夫か、胡蝶!？」

「ああ、なんとかな」

胡蝶はそうゆうと左手の雷を球体にした。

「さあ、これで形成は逆転した」

「くっ!俺が正史の奴らに」

少年は苦虫を潰したような顔をして胡蝶達を睨んだ。

そして、少年は何かを思い付いたかその場で銅鏡を割った。

「なっ!?!いきなり何をしている!」

「ふふっ、すぐに解るさ」

そう言うと割れた銅鏡から強い光が放たれた。

「なっ!」

「眩っ!?!」

胡蝶達は光に吞まれ、光が止んだ時には胡蝶達は消えていた。

4、蝶と異世界と正義のガンマン(前書き)

すみません、更新が遅れました。

4、蝶と異世界と正義のガンマン

今、白井 胡蝶はとてつもない状況に立たされている。

理由は簡単。胡蝶は目が覚めたら見知らぬ場所に居るからだ。

「おい、ここどこだよ……………」

周りを見た胡蝶は力の無い声を漏らした。

胡蝶の周りは木々が生い茂っていて、森だと解った。

「てか何で森に入るんだ。確か、俺……………」

胡蝶はここに居る前の記憶を思い出した。

（確か、一刀と学園の歴史博物館に行つて、変なこそ泥と出会つて攻撃されたけど一刀と返り討ちにしたな。そう言えば、その時変なこそ泥が鏡を割つて、鏡が光つて……………」

「あの鏡が原因か……………」

鏡の事を思い出して胡蝶は大きな溜め息を吐き出した。

その時、胡蝶は自分の変化に気が付いた。

それは自分の服装だった。ここに来る前は、地味なTシャツとジーンズだったのに今は黒を基調としたコートとズボンでウェスタンハ

ツトが側に有り、腰にはベルトと弾丸、そして家に有るはずの蝶と薔薇が有ったのだ。
バタフライ・ローズ

「蝶と薔薇？なんでこんな所に」

蝶と薔薇を出して胡蝶は本物が確認したが、この蝶と薔薇は本物だった。

「……。訳も分からない場所に変わった服、そして蝶と薔薇。どうなっているんだよ、まったく！」

胡蝶は今の状況に苛立ったが、すぐに苛立ちは収まった。

その理由は微かだが人の悲鳴が聞こえたからだ。

「悲鳴？どこからか解らないが、ここに居ても仕方がない」

胡蝶はそう言って悲鳴が聞こえた方に向かって走り出した。

—————

「……………。これは」

走り出してから数分。森を抜けた胡蝶が見たのは、燃え上がっている村だった。

「きゃあああああ！！！」

「逃げる！！！」

燃え上がっている村で村人が悲鳴を挙げて逃げ回っている。

「ヒヤヒヤヒヤ！！殺せ、殺せ！！」

「おら、黄巾党のお通りだ!!」

村人を追って武器をもった男達が這いずり回る。

「死ね!!」

「ぎいやあああ!!」

男の一人が村人を剣で斬り殺した。

それを見た胡蝶は驚愕した。

目の前で人が死んだのだ。

「嘘だろ……………」

胡蝶はただ村を見ていると、胡蝶の元に少女が来た。

「た、助けて下さい!!」

「えっ!?!」

いきなりの事に胡蝶は驚いたが、そんな時にそれに気づいた男が少女を追いかける。

「まだ、居たのか。待て!!」

男は走り出して少女を捕まえた。

「いやっ!! 離して!!」

「離すかよ。へっへっへ、いい上玉じゃないか」

「いやっ!! 助けて!」

男は不気味な笑いで少女に言った。

胡蝶はそれを見てただ呆然としていた。

いきなり訳も分からない場所に来て次は、目の前の虐殺に近い光景。

胡蝶はもう何か何だか分からなくなって混乱していた。

「いやっ! 助けて、助けて下さい!!」

少女は胡蝶に向かって涙ながらに叫んだ。

だが、胡蝶は混乱していて分からなくなっていた。

だが、胡蝶は目の前の少女を見て、何故か一刀を思い出した。

一刀ならこんな状況になったらどうするか。

そう考えていると胡蝶は少し笑った。

「ふっ……………、馬鹿だな。俺は」

一刀なら混乱しても必ず、目の前の少女を助ける。

胡蝶は何年も一刀と居たから一刀の考えは全て解る。一刀はどんな状況でも目の前に居る困った人を助ける。それが一刀の生き方だ。

そんな一刀と何年も居ていつしか一刀の生き方が胡蝶にも根付いて

いた。

胡蝶は何か吹っ切れたように少女と男の前に立った。

「おい、その子を離せ」

「ああ？」

男は胡蝶を睨みつけて剣を向けた。

「何、邪魔しやがる！てめえ、死にてえのか」

男は胡蝶を脅すが胡蝶は臆せず歩き出す。

「それで俺を脅すか」

胡蝶はゆっくりとゆっくりと男に近づく。

バチッ！！

そして、近づきながら雷を体に流し出した。

「なっ！？何だおまえは！！」

雷を見た男は怯えながら胡蝶に言った。

「さあな。俺が何者だとしても、おまえに教える義理は無い！！」

胡蝶はそう言って男の顔に向かって拳を放った。

「へぶっ！！」

男は殴られた衝撃で普通じゃ有り得ないほど飛んだ。

その理由は胡蝶の拳に雷が発せられていて、その雷で腕の筋肉を活性化させて殴ったからだ。

胡蝶は男が飛んだ事を確認して、腰を抜かした少女に手を差し出した。

「大丈夫か」

「えっ……。あつ、はい！」

少女は慌てて言っつて胡蝶の手を掴み立ち上がった。

「大丈夫そうだな。なら、急いでここから逃げた方がいい。ここに居ても殺されるのが落ちだからな」

「あ、あの……。あなたはどうするんですか」

少女は心配そうに胡蝶に言った。

それを聞いた胡蝶は、ベルトにある蝶と薔薇を抜いて弾丸を込めた。

「俺はこれから村の賊を追い出す」

「黄巾党を一人で！？無茶です！」

「無茶か。心配するな、だって俺は……………」

胡蝶はコートを靡かせて少女に背を向けて言った。

「正義のガンマンだからさ」

—————

「ヒヤヒヤヒヤ！！殺せ殺せ！！」

燃え上がっている村の中で黄色い布を巻いている賊・黄巾党の男が
高笑いしながら言った。

「それにしても県令の奴が尻尾を巻いて逃げるとは。飛んだ拍子抜
けだぜ。まあ、だから簡単にいつたんだがな」
村を守る筈の県令が逃げた事に感謝した。

「おい、野郎共！とっとと金目の物を掻払って行くぞ！」

『おおー！！！』

男の言葉に周りにいた賊が叫んだ。

すると、賊の一人が男の元に走ってきた。

「大変です、兄貴！！」

「何だ」

「へい、見張りが遠くからですが土煙を挙げてこっちに来る奴らが
いると言っています」

「何だと！？それで、そいつらは誰だ」

「牙門旗が曹ですから多分、頓丘の県令をやっている曹操だと思います」

「なんだと！？よりもよっぽって曹操か……。ちっ、仕方ねえバツクしるぞ！！」

男は曹操が来たと知って撤退を指示した。

それもそうだ。頓丘の県令・曹操は知力も武も長けていて部下にも恵まれている。

だからこそ男は曹操とやり合う事を拒んだのだ。

男は賊の一人に撤退を指示しようとした時、向こうから乾いた音がして賊の一人は頭から血を流し倒れた。

「なっ！どうした！？」

いきなりの事で動揺したが、音がした方から黒い服の少年・胡蝶がこっちに歩いてきた。

「おまえが黄巾党の頭か」

胡蝶は男に蝶と薔薇を向けて言った。

「なんだ、てめえ！いきなり現れて何の要だ！」

「何の要かか。まあ、簡単に言っておまえ達を倒して村から追い出

したいんだが」

男の質問に胡蝶は簡単に答え蝶と薔薇の撃鉄を起こした。

「追い出すだあ！？てめえ一人で何が出来る！！」

「そうだな。一応はおまえ達を倒す事は可能だが」

「なんだと！！上等だやってやらあ！」

胡蝶の挑発に男は乗って剣を構えた。

それを見て胡蝶は男を狙ったが、後ろから数人の賊が襲いかかってきた。

「なんてな！そう簡単に挑発に乗るかよ馬鹿が」

挑発に乗った振りをしてた男は笑いながら言った。

後ろからいきなり襲いかかってきたら、いくら強くてもひとたまりも無い。

男はそう考えていたが、実際は違った。

パパパン！！

胡蝶は後ろから襲いかかってきた賊達を蝶と薔薇で一瞬に撃ち殺したのだ。

「やれやれ。後ろから不意打ちとは関心しないな」

「な、なんて奴だ。一瞬で全員やりやがった……………」

さっきの胡蝶の腕に男は戦意喪失したのか剣を落とした。

「これで終わりか？」

「う、うわああああああ！！！」

胡蝶に蝶と薔薇を向けられた男は大声を挙げて逃げようとした。

だが、胡蝶はそれを許さなかった。

「逃げるか……………。だが、逃がしはしない」

そう言って蝶と薔薇の撃鉄を起こし、逃げる男を狙いそして……………。

パン！！

蝶と薔薇から乾いた音がした。

そして、その音と共に男の胸に風穴が空き男は絶命した。

胡蝶はそれを確認して蝶と薔薇をベルトのホルスターに閉まった。

「終わったか……………」

そう呟いてその場から立ち去ろうとしたのか時……………。

「待ちなさい」

後ろの方から女性の声がした。

振り向くとそこには、何百、何千の兵士と三人の少女がいた。

胡蝶はこの時、後に自分の命より大切な少女に会った瞬間である。

5、蝶と曹操と真名と（前書き）

249「遂に、プロローグが終わります。そして次は座談会パート2をやります」

5、蝶と曹操と真名と

「待ちなさい」

胡蝶は後ろを振り返るとそこには、何千の兵士と三人の少女が居た。

「何だ、義勇軍か？なら済まないな。賊なら俺が始末した」

胡蝶はそう言い近くの死体を見た。

「へえ〜。あなた一人で全員」

「まあ、一応この村に居たのはな」

金髪の少女の一人が聞いた事に胡蝶は素っ気ない答えを返した。

「貴様！！華琳様になんて言い方を！」

すると、金髪の少女の側にいた黒髪の少女が胡蝶に向かって剣を抜こうとした。

それを感じ取り、胡蝶も蝶と薔薇を抜こうとした。

「二人共止めなさい！」

その瞬間、金髪の少女が覇気を放ち止めた。

「す、すみません華琳様！」

「っ!」

その覇気に当てられ胡蝶と黒髪の少女は止まり、互いに武器から手を離れた。

「やれやれ、まったく姉者は少しは落ち着いてくれ」

「まったくよ。春蘭は落ち着いて話すって事を学んでくれないかしら」

「うう〜。秋蘭、華琳様」

それを見ていた青髪の少女は黒髪の少女に注意して、それに続いて金髪の少女も注意した。

それを見ていると、青髪の少女が胡蝶の所に来た。

「さっきは姉者が無礼な事をして済まなかったな」

「あ、ああ。大丈夫だ。気にしていない……」

青髪の少女の謝罪に胡蝶は少し顔を赤くして言った。

それは、青髪の少女が美人だったのもあるが、胡蝶は少女元、女性に免疫が無いからである。

何故、免疫が無いかと言うと、あっちでは胡蝶に近寄ってくる女性は無く、もし近寄って来てもその女性は胡蝶を女性と間違えるからだ。

胡蝶が顔を赤くしているのを見て黒髪の少女がこっちに来て二人の間に割り込んできた。

「ええい、離れろ！貴様、今秋蘭を変な目で見たな！！」

「姉者！？いきなり何をするんだ」

「秋蘭は黙っている！貴様、秋蘭にもし手を出したら只じゃおかないからな！！」

黒髪の少女の威嚇に胡蝶は若干引いて、青髪の少女は何がなんだか分からないでいる。そんな時、金髪の少女が黒髪の少女の前に立った。

「春蘭、少し落ち着きなさい。あなた、何を勘違いをしているの？」

「ですが、華琳様」

「春蘭」

「はい……………」

金髪の少女の威圧に黒髪の少女が負けて胡蝶に離れた。

「済まないわね。うちの子がさっきから変なまねをして、私からも改めて謝罪をするわ」

金髪の少女はそう言つと頭を下げた。

「いや、頭を上げる！さっきも言ったが俺は気にしていない。それ

に、昔から言われるのは慣れている」

胡蝶はそれを見て慌てて言った。

その姿を見て金髪の少女と青髪の少女はクスリと笑った。

「ふふふ、可笑しいわねあなた」

「うっ、何がだ」

「だって、さっきの慌て様もそうだけど、女なのに俺なんて言うから」

それを聞いた胡蝶は、悟っていたのか少し溜め息を付き金髪の少女に言った。

「なあ、一つ良いか」

「ええ、良いわよ」

「なら単刀直入に言う。俺は男だ」

「えっ、……………ええええええええ！？」

「なっ！？」

それを聞いた金髪の少女と青髪の少女は胡蝶を女と間違えていたらしく、男だと聞いて驚いた。

「やっぱりな……………」

胡蝶は若干暗くなりまた溜め息を付く。

「えっ、華琳様。分からなかったんですか」

「分からないわよ！何、あの顔、誰が見ても女って言うわよ！って春蘭、あなた分かってたの」

「えっ、ええ。何となくですが」

「野生の勘だな」

少女達のやりとりを見て胡蝶は少し笑った。

「なっ、何だ！何が可笑しい！！」

「いや、済まない。女性ってこんなやりとりをするんだなって」

胡蝶は今まで、女性と関わった事が無いため、女性がこんなやりとりをするとは思ってなかった。

そんな時、胡蝶を見て金髪の少女はある事に気付いた。

「そう言えばあなた、見たことのない服を着てるわね」

「ん、そうか」

「ええ、それに腰のそれ、見たことない物だけど武器なんですよ」

胡蝶は金髪の少女の鋭い洞察力に驚いた。

「ふっ、大した洞察力だな」

胡蝶はそう言っていると金髪の少女の方を向いた。

「俺は白井 胡蝶。最初に言っておく俺はこの時代の人間じゃない」

「なんだと!!」

「へえ……………」

「ほう……………」

いきなりの発言に黒髪の少女は驚いたが、金髪の少女、青髪の少女は共に驚いた素振りをしていない。

「……………。驚かないのだな。いきなりこの時代の人間じゃないと言われたのに」

「驚かないわよ。だってこの国で見たことのない服に武器、多分、この国の隅々を探しても無い物を持っていてこの時代の人間じゃないなんて言ったら分かるわよ。それに、こんな事で動揺したら天下は取れないわ」

「天下か……………。そう言えば名前を聞いてなかったな」

胡蝶はそう言って金髪の少女の名前を聞いた。

「私？そう言えばそうね。私は頓丘の県令をやっている曹操よ」

「そうか、曹操か……………。曹操？」

「ええ、曹操よ」

「はああああああ！！」

金髪の少女の名前に胡蝶は驚いた。

曹操。それは誰もが知っている三国の英雄の名前。

それを目の前の少女が名乗ったら普通は驚く。

「うるさいわね。いきなり何？」

「い、い、いや、済まない。曹操、一つ良いか？」

「何よ」

「いや、まさかそこに居る二人は夏侯敦と夏侯淵じゃなからうな」

胡蝶の問いに曹操ではなく黒髪の少女が反応した。

「貴様！何故、私と秋蘭の名前を知っている！！」

「当たりか。あは、あははははは………」

胡蝶は当たりたくない問いが当たってしまい力の無い笑いをする。

「華琳様」

「何、秋蘭」

胡蝶をよそに青髪の少女・夏侯淵が曹操に話し掛けた。

「もしかしたらこの男が天の御使いではないでしょうか？」

「天の御使い？あぁ、確か胡散臭い占いに出てたあの」

「はい、もしかしたらですが」

それを聞いた曹操は少し考えて、胡蝶に言った。

「胡蝶。あなたこれから行く宛はある？」

「宛か？宛なら無いが」

「そう、なら私の元に来なさい」

「は？」

「華琳様！？」

曹操の言葉で、胡蝶は間の抜けた、黒髪の少女・夏侯敦は驚きの声をあげた。

「何、あなた行く宛が無いんでしょう。なら、良い提案だと思うけど」

「まあ、良い提案ではあるが、何を考えている」

胡蝶は怪しい眼差しで見ている曹操を睨み付けた。

「へえ、ただの男だと思ったら良い勘ね。これなら天の御使いって言うっても申し分ないわね」

「天の御使い？なんだそれは」

胡蝶の問いに曹操の側にいた夏侯淵が説明をしてくれた。

「どうやら、どこかの占い師が『この乱世を静めるが為、天から天の御使いと異界の戦士が現れる』と言っているらしい。」

「それで、俺を天の御使いに祭り上げると」

「そうよ。言っておくけど拒否権は無いわよ」

胡蝶は拒否権が無いと聞いて深い溜め息を吐く。

「ここで断ったら多分、と言つか必ず面倒くさい事になる。」

「分かった。天の御使いでも何でもやってやる」

「ふふふ、懸命な判断だわ」

曹操のしてやったりと言わんばかりの答えに胡蝶は若干苛立ったが、もうどうでもいいと思って落ち着いた。

「それではよろしくね、胡蝶」

「ああ。よろしくね、曹操」

二人は握手をすると、曹操はふと、ある事を思い出した。

「そう言えば、真名を授けてないわね。私の真名は華琳よ。次から華琳と呼びなさい」

「真名？真名とはなんだ」

聞き慣れない言葉に胡蝶は首を傾げた。

「貴様、真名もしらないのか！」

「知らないから聞いている。少しは頭を使え」

「な！？なんだと！！」

胡蝶の指摘に夏侯敦はキレて剣を抜こうとした。

「春蘭、落ち着きなさい。胡蝶はこの時代の人間じゃないのだから真名も知らないのよ」

「そつだぞ姉者。さつきからどうしたのだ。何かと胡蝶に突っかかって来て」

「うう……。それは……………」

二人は夏侯敦を注意して夏侯敦は叱られた子供のように落ち込んだ。

「それで、曹そ……。いや、華琳。真名とは一体何なんだ」

胡蝶は曹操に真名に付いて聞いた。

真名とは。自分のもう一つの名前であり、気を許す友や恋人、自分が仕える主に授ける名前、その名前を他人に呼ばれる事は自分を侮辱された事に等しいくらい神聖な物である。

「……………。ありがとう。ある程度は分かったが、良いのか、そんな神聖な名前を俺に授けて」

説明を聞いた胡蝶は曹操に自分に真名を授けた事を問う。

「何で授けたかですって？簡単な事よ。あなたはもう私の部下、部下に真名を授けるのは当然の事よ。それに……………」

「それに？」

「それに、あなたが私を裏切らない為の保険も兼ねて授けたのよ」

曹操の言葉に胡蝶は圧倒された。

それは、曹操の自信ある態度もそうだが、自分の真名を保険の為に表して見ず知らずの胡蝶に授けたからだ。

「保険で自分の真名を……………。ふはははははあ！！！」

「あら、どうしたのいきなり笑って」

「いや、済まない。つい、おまえの行動に度肝が抜けてな。良いだろう。こんな事をしてくれたんだ。期待に答えよう。改めてよろしく頼む、華琳」

胡蝶は、曹操・華琳の前で跪いた。

それは、華琳の期待に答える為、そして、華琳とゆう人間に惹かれたからである。

「ふふふ。なら、期待通り、私の覇道の為に働きなさい胡蝶。」

「ああ、分かった。華琳の霸道。俺の力で切り開いて見せよう」

そして、胡蝶はこの瞬間。曹操・華琳の配下になった。

5、蝶と曹操と真名と（後書き）

249「遂に、プロローグが終わったぞ!!」

胡蝶「やっと終わらしたか。案外長かったな」

華琳「そうね。それにしても……………、駄文ね」

249「がはっ!!」

胡蝶「まあまあ、仕方ないだろそれは。書いているのがこいつなんだからな」

249「ぶはっ!!」

華琳「それもそうね」

249「……………」

胡蝶「あっ、作者が砂の塊になった」

華琳「まったく、軟弱ね」

249「……………」

胡蝶「って、もうこんな時間か」

華琳「なら、アレをやるわよ」

胡蝶「分かった」

胡蝶・華琳「それでは」*。
。
ノノ
「
「

6、祝！プロローグ完結記念、蝶と魔王と座談会と（前書き）

249「読者の皆さん、更新が遅れて本当に済みません！！そして今回はプロローグ完結とアクセス数10000突破記念の座談会です。そして、今回の座談会もJAMさんとJAMさんの小説のキャラクターが出ます。出来ればそちらも読んで下さい。では、座談会開幕です」

6、祝！プロローグ完結記念、蝶と魔王と座談会と

249 「ふふふ……。遂に来たぞ。来ましたよ」

陽・胡蝶 「おい、馬鹿作者。いい加減やれよ」

華琳 「まったく、伸ばし過ぎよ」

ギア 『その通りですね』

249 「うっ、わったよ。それでは第2回、座談会。タイトルは『魔王VS雷帝！ドキドキ！？カオスだらけのお題勝負』開催です」

ばふばふばふ。

249 「ってことで始まりました座談会。んで司会は一応、胡蝶の夢の作者249と」

胡蝶 「胡蝶の夢の主人公白井 胡蝶と」

陽 「もう一つの小説、鋼鉄の仮面の主人公長瀬 陽」

ギア 『その執事のギア』

華琳 「曹操こと私、華琳が」

全員 「『お送りします』」

249「そして、今回のゲスト、JAMさんとJAMさんの小説の主人公星華さんとリリスさん。そして、誰もが認める無敵の魔王ことなのはさんです」

JAM「どうも〜」

星華「久しぶりですね皆さん」

リリス「私の場合は始めましてね。私はリリス・エ・シュバルツシルト。リリスって呼んでね」

249「久しぶりですねJAMさん。いや〜、第1回目はありがとうございました〜」

JAM「いえいえ、そんなこちらこそありがとうございます」

陽「久しぶりですね星華さん……。って星華さん！？なんで縮んでるんですか！？」

星華「ああ、久しぶりですね陽。そして、縮んでる事は分かりませんが、多分、リンカーコアが関係が有るはずですが」

ギア『それは災難ですね』

リリス「うわっ！？何、この機械」

ギア『ん。これはこれは、確かにリリス嬢でしたね。私はマグナギア、マスター・陽の執事を勤めてる物です」

リリス「は、はあ……………」

華琳「あら、また可愛い娘が居るわね。ん？」

胡蝶「久しぶりだな、高町。なのは。今回も勝たして貰うぞ」
ゴゴゴゴ」

なのは「にゃははははは……。やだな胡蝶君、今回はそう簡単には負けないよ」
ゴゴゴゴゴゴ」

華琳「……。何かしら、あそこからもすごい殺気を感じるのだけれども」

陽「華琳さん。あれは仕方がないなんてっただって因縁深い相手だからな」

星華「あの二人の後ろからはやてから借りた漫画の魔王と雷神が見えます」

胡蝶・なのは「おい（ねえ）作者」

249・JAM「は、はい」

胡蝶「早く、勝負させる。さもないとプラズマで消し炭にするぞ」
ゴゴゴゴゴゴ」

なのは「そうだよ。このままだとSLBで頭を冷やさせるよ」
ゴゴゴゴ」

249・JAM「サー・イエス・サー！！>（；）！！」

陽「あ……。遅いから脅してやらせたよあの二人」

ギア「そうですね……。ってあなた達！何、私を盾にするんです

か！！」

華琳「だって、仕方ないじゃない！あの二人の殺気はただ事じゃないわよ！！」

リリス「そ、そ、そうですよ！なんですかあの二人は人ですか！？」

星華「怖いです……………グスツ」

陽「つ……………／＼。くそつ。可愛いな、おい」

ギア『それには深く同意します／＼』

華琳「ああ、可愛いわね。食べちゃいたいわね／＼」

リリス「やっぱり、可愛い娘は宝ね／＼」

星華「う？どうしたんですか皆さん？（首を傾げる）」

華琳・リリス「ああ！！もう無理、我慢出来ない！！（飛びかかり）」「」

ギア『（星華を抱えて守った）やれやれ、華琳嬢、リリス嬢。可愛いのは分かりますが、星華嬢を襲わないで下さい』

陽「まあ、分からなくてもないが襲うのはいけないだろ」

華琳「何よ良いじゃない、と言つか私は襲うのではなく可愛がろうとしただけよ」

リリス「そうよ、私だって少しベッドで可愛がろうとしただけだし
陽「おい、ゴラア。今ベッドで言ったろ。まず、おまえらは可愛が
るの定義を変える」

ギア『そうですね。っと、こんな事をしてる間に二人の準備が完了
したらしいですね』

星華「え？JAMと249はいつから準備なんてしてましたっけ？」

ギア『それはですね。さつき胡蝶殿となのは嬢が二人を一向に勝負
が始まらないから脅してましたね』

星華「はい」

ギア『それで二人は急いで今回の勝負会場を作ってたんですよ。胡
蝶殿の監視の下で』

星華「……………。なんだか想像しただけで恐ろしいですね」

ギア『そうですね。では早く行きますか。三人共行きますよ、早く
行かないとプラズマとSLBが飛んできますよ』

陽・リリス「はい！只今！！」

華琳「分かったわ」

—————

249「あゝ、これよりお題勝負の二回目、早押しクイズを始め
ます」

胡蝶「やつとか(ゴゴゴゴゴゴ)」

なのは「にやはははは、待ちくたびれたの(ゴゴゴゴゴゴ)」

249「うつ、そんじゃルール説明をします。ルールはどちらかが先に5問解き終わったら勝ちになります。そしてクイズは全ジャンルから出します」

陽「まあ、良くあるタイプだな」

249「そして、クイズの答えを間違った場合はお手つきと見なし一回休みになります」

華琳「これも定番ね」

249「それではさっさとやりますか、第1問！ジブリ作品で「飛べない豚はただの豚だ」のセリフで有名な作品……………」

なのは「紅の豚！！」

ブブー！！

なのは「えっええええ！！なんで!?!」

249「なのはさん、問題は最後まで聞こうよ。って事でなのはさんはお手つきで一回休みです」

ガラン、ガラン！

なのは「ふにゃあ!?!(頭から盥が降ってきた)」

全員『盥!?!』

胡蝶「……………!!盥って……………。てか、なのはは気絶してるし」

なのは「みゅ〜〜」

249「あ〜。あの盥、ちょっと仕掛けがあって、どんな凶暴な人でも数分な気絶するように出来てます。それで問題の続きですが、ジブリ作品は紅の豚ですが、その紅の豚の主人公は？」

胡蝶「マルコ」

ピンポン!

249「正解!胡蝶1ポイント」

胡蝶「よしっ!!」

249「そんじゃ次いくか第二問!ホラー映画でアイスホツケーの仮面を付けたチェーンソーを持って人が出てくる映画の名前と主人公は?」

胡蝶「13日の金曜日でジェイソン」

ピンポン!!

249「正解!まあ、簡単だったかな」

陽「あ〜。あつたなそんな映画」

JAM「確か、ジェイソンって水がダメだったね」

249 「そうそう、おっなのはさんが起きた」

なのは「うう〜。すっかり寝ちゃたの」

249 「なのはさんも起きたし第三問目！チャーハンの問題で、チャーハンをパラパラにするのに入れたら良い物は？」

胡蝶「うっ！なんだっけ」

なのは「もらったの！答えはマヨネーズ！！」

ピンポーン！！

249 「正解！正解はマヨネーズ。理由はマヨネーズで米をコーティングするからです。後、マヨネーズじゃなくてもお酒でもOK」

星華「そうですか、凄いですねなのは。勉強になります」

なのは「えへへ、照れちゃうの〜／＼（星華ちゃんに褒められるならもつと頑張っちゃうの）」

249 「おほん、そんなじゃ第四問！音楽の問題です。これから流れる曲のタイトルを答えて下さい」

がんばるとき

つらいとき

夢が紡ぐお話しが好き

だって素敵……………

なのは「童話迷宮!!」

249「正解!てかこれはサービス問題だったね」

リリス「あれ?そう言えば今の曲、なのはさんの……」

249「では次!!」

ギア『あ、ごまかしましたね』

249「第五問!これから言う物の関連性は何でしょう。リオン・マグナス、沙慈、ひ……………」

胡蝶「ウザいキャラ」

ブツブツ!!

249「残念、不正解。って、胡蝶よお沙慈がウザいのは分かるがリオンはちゃうやろ〜。って事で、盃発射!!」

ブワン。ガラン、ガラン!

胡蝶「くっ!?!」

陽「胡蝶さん!!おい作者、今空間が裂けたぞ!どっから盃出した!」

249「……………」

陽「なんとか言えやあー!!」

249「てへっ、秘密」

陽「キモいわー!!」

なのは「ねえ、二人共。くだらない事やってないで早くクイズやる
うよ……………(ゴロゴロゴロゴロ)」

249「は、はいっ!でクイズの続きはリオン・マグナス、沙慈、
ヒイロ・ユイこの三人の関連性は」

華琳「?何かしら」

星華「……………。難しくです。ギアとJAMは分かりましたか」

ギア『はあ、なんとなくですが』

JAM「あははは、249さんはかなりヲタクだね」

なのは「うん。分かんないの」

チツチツチツ!

ブッブー!!

249「残念時間切れ。正解は声優が全員緑川さんだったです」

なのは「うう。分からないよ」

JAM「まあ、二人は一般人だからね」

249「それではなのはさんだけで第六問！菌の問題。科学上で腐敗と発酵があります。ではその発酵の例をあげなさい」

なのは「発酵の例？どうなんだろう」

華琳「ふん、こんなの簡単じゃない」

陽「えっ、これ簡単なのか？」

星華「発酵……。発酵って確かパンを作る時に」

なのは「パン……。分かった！答えは、パンの作る時に酵母を使つて寝かせるをやる事！」

249「うん。パン作りか」

なのは「え〜〜！駄目なの」

249「うん、パン作りの時に酵母を入れて寝かせるのは一応発酵だから正解かな」

ピンポン！！

なのは「やったー！！」

249「ちなみに発酵の例はパン以外にお酒やチーズ、鰹節もあるからね」

JAM「へえ〜。鰹節も発酵なんですか」

249「はい。発酵は要するに物が腐って、人間に利点のあるが発酵で、害があるのが腐敗ですからね」

なのは「星華ちゃんありがとう！星華ちゃんのおかげで正解出来たよ」

星華「えっ、私ですか！？私、なのはの力になれましたか？」

なのは「みゃう〜〜！（ヤバいの！星華ちゃんの力になれましたか発言！）」

ギア『ああ〜。やられましたね』

249「そうだね。あつ、そうだ胡蝶を起こさないと」

胡蝶「もう、起きてる」

249「うわあ！？ビクツた」

胡蝶「まったく、なんだよあの盥は、普通の盥であんな事になるのか」

陽「あ、それ俺も思った」

249「ああ、盥ね。あの盥は……………」

????「ワシが作ったからだ」

胡蝶「誰だ！」

????「ファ、ファファ!!そう警戒するな」

249「あ、来たのエクステス」

エクステス(省略エク)「ファファファ。いや、余りにも暇でなし遊びに来たのだ」

陽「おい、作者!!なんでFF5のラスボスがいんだよ!!」

249「え?いや〜。俺、エクステス好きだから呼んだの」

JAM「そして、この会場と盃はエクステスさんの無の力で作られています」

星華「すごいんですね、エクステス」

エク「ファファファ!!凄くはないぞ闇の欠片よ。こんな物、無の力で簡単に出来る」

星華「!?!なんでそれを」

エク「貴様もそう警戒するな。今日は宴なのだから楽しもうではないか」

星華「……。そうですね」

エク「それに、これ以上やっているとワシの身が危険だからのお」

なのは「ちっ！気づかれたの」

星華「なのは！？なぜ、レイジングハートを構えているのですか！？」

エク「さしずめ大切な物を侮辱されたから怒っているのだろうな」

なのは「分かっているなら喰らえなの！デイバイン・バスター！！」

エク「ふはははは！！無駄だ！」

エクステスはデイバイン・バスターをハイガードで防いだ。

リリス「え！？あの攻撃を防いだですって！！」

華琳「あの壁、かなり頑丈なのね」

249「そりゃあ、エクステスの防御力は多分FFシリーズ最高だからね」

胡蝶「おい、早くクイズやらないか？」

249「そうだね。では第七問！科学の問題。空気中の酸素を電気分解すると何が出来る？」

なのは「電気分解！？いきなり難しくなったの！」

陽「やっべ、分かんねえ」

リリス「あ〜。確か……………」

胡蝶「貰った！答えはオゾン」

ピンポンー!!

249「正解。オゾンはO₃で、電気分解すると、O₂である酸素が結合してオゾンになります。ついでにオゾンは有毒だから実験する時は気を付けてね」

胡蝶「ああ、これは前に一刀にやったからな。だが、あいつオゾンを吸っても生きてたな」

ギア『オゾン吸って生きてるなんて、あの人は人ですか!?!』

胡蝶「まあ、頑丈なのが取り柄だからな」

JAM「頑丈って……………」

249「ん、はいはい……………。ええ〜。皆さん、これから途中経過を発表します」

胡蝶・3ポイント

なのは・4ポイント

249「って事でなのはさんは後、一問正解すると5ポイントなので勝利します」

なのは「後1ポイント……………。頑張るのー!!」

胡蝶「なのはに勝には後2ポイントか、これは引けない戦いだな」

249「そうだね胡蝶も頑張っつて!第八問!」

なのは・胡蝶「ゴクッ……………」

249「最近ドラマに取り上げられた、土佐藩の武士で恩師の勝海舟と海軍を作った人は!!」

胡蝶・なのは「貰った!」

問題を言い終わった瞬間。胡蝶となのは同時にボタンを押した。

そして、解答の権利を取ったのは……。

249「……………解答者は、なのはさん!!」

胡蝶「何!？」

なのは「えっ……………。私?」

249「そうだよ。一応は二人同時だったけど、ボタンが反応したのはなのはさんだから解答者はなのはさんだよ」

JAM「いや…………、今はけっこうシビアでしたね」

華琳「そうね。正直、二人が同時だったから分からなかったわ」

リリス「本当。ってなのはさん答え、答え!」

なのは「あっ!忘れてたの!？」

陽「忘れてたのかよ!？」

ギア『まあ、分からなくてもないですがね』

249「まあね。それでなのはさん答えをどうぞ!！」

なのは「えっ!?!あっ、あっ!！」

星華「落ち着いて下さい、なのは」

なのは「えっ、星華ちゃん」

胡蝶「そつだぞ。おまえは動揺しすぎだ。一回、深呼吸をしろ」

なのは「えっ?う、うん。すう〜、はあ〜。ふう〜少し落ち着いたの〜」

胡蝶「まったく……」

なのは「ありがとう胡蝶君。でも、なんで私にアドバイスを？」

胡蝶「ふっ。何、銃士である俺があひの解答権を取れなかった瞬間からおまえに負けたからな。なのに、おまえが動揺して答えられないなんて笑えないからな」

なのは「にやはははは………。ひどい言われようなの」

星華「なのは、白井 胡蝶の行為を無駄にしては無礼です。さあ、早く答えを」

なのは「そっだね。249さん」

249「はいはい。では、なのはさん答えをどうぞ」

なのは「答えは、坂本 龍馬」

ピンポン!!

249「正解!で、この瞬間。なのはさんのポイントが5になりましたので今回のお題勝負、勝者はなのはさん!」

星華「おめでとございます。なのは」

リリス「おめでと、なのはさん!」

JAM「おめでと、なのは」

華琳「なかなか面白かったわよ」

陽「熱い戦いだったな。そっだろギア?」

ギア「はい、熱い戦いでしたね」

エク「フアフアフア!! 実に面白かったぞ!」

なのは「みんな、ありがとうなの。あれ、胡蝶君は?」

陽「そう言えば、胡蝶さん居ないな」

249「ああ、胡蝶なら早めに帰ったよ」

リリス「えっ、それって、勝負に負けたから……」

249 「うんにゃ、それは無いなりよ」

JAM 「それはどうして？」

249 「あいつ、帰る時、悔しそうな顔じゃなかったからね。俺の予想だと多分、次の対決の為に特訓に行ったね」

華琳 「特訓ね。ふふふ、敗北しても次の戦いに備える。それでこそ私の配下ね」

249 「配下って……、なんだろう。華琳の配下発言でかなり危ない発言に聞こえるのは」

JAM 「ははは……。ん、もうこんな時間だ。249さん。私達もう帰ります」

249 「あつ、はい。今回はありがとうございます」

JAM 「いえいえ、こちらこそありがとうございます」

陽 「それでは、星華さん、なのはさん、リリースさん。また今度」

ギア 『今度は私を盾にしないで下さいね』

華琳 「待たね、三人共。後、星華。私は必ずあなたを手に入れるから」

なのは 「にゃはははは……。華琳さん、星華ちゃんは渡さないよ（ゴトゴトゴト）」

星華「落ち着いて下さい、なのは。それではお邪魔しました」

リリース「またね、みんな！」

249「ほいほーい。待たねー」

なのは「ねえ、249さん」

249「ん？どつたの」

なのは「うん、後でね胡蝶君にさっきはありがとうって……………」

249「ほーい分かった。伝えておきましょう」

なのは「ありがとう。249さん」

JAM「なのはさん！行くよ」

なのは「はーい！じゃ今日はありがとうごさいます」

249「ほいほーい。待たねー」

こうして座談会は無事終わった……………。

7、蝶と資料と桂花と（前書き）

249「最近、更新が遅くなっていますが、作者は頑張ります！！それでは開幕です」

7、蝶と資料と桂花と

胡蝶が曹操事、華琳の部下になって数週間、胡蝶は託丘の華琳の城にある部屋に居た。

「ふう……………。これで終わりか。秋蘭、頼まれた仕事終わったぞ」

「ああ、済まないな。おかげで助かった」

部屋に居た胡蝶は一緒に居た秋蘭に机にある、まとめた書類を渡した。

何故、胡蝶が書類をまとめていたかと言うと、城に付いて数日経った時、華琳が胡蝶に「私の部下になったんだから少しは働きなさい」と言われ、胡蝶はこの数日は秋蘭の仕事の補佐をしている。

最初の事は漢文で書かれていた書類に苦戦したが、約二、三日で胡蝶は大体読めるようになった。

「……………よし。白井、今日はこれで終わりだ」

書類を片づけながら秋蘭は言った。

「そうか、それにしても秋蘭は仕事が早いな」

「ふっ、それもこれも白井のおかげだ。始めて見る文章も数日で読めるようになるとは、さすが天の御使いだな」

「そう褒めるなよ。俺はただ昔習った事を生かしたただけだ」

秋蘭に褒められた胡蝶は少し照れながら言った。

「ふふふ。おまえがそう言うならそう言うことにしよう」

「うつ、……………からかうな」

からかわれた胡蝶は少しジト目で秋蘭を睨んだ。

睨まれた秋蘭はまだ笑っていた。そんな時、部屋に文官の一人が入ってきた。

「夏侯淵様、御使い様。すみませんがこの資料を見てもらえませんか」

「資料か、分かった。見ておこう」

秋蘭に言われた文官は資料を机に置いて部屋を出た。

「秋蘭、その資料はなんの資料だ？」

「ん、ああ。これは今度の盗賊討伐の時の兵糧のやつだな」

秋蘭は説明をして資料に目を通すと、しばらくしてから顔が険しくなった。

「?どうした」

「白井、おまえはこれを見てどう思った」

胡蝶は書類を見ると胡蝶は驚いた。

「おい、秋蘭。これは何かの書き間違いか？」

「うん、それならそれで問題なのなが……。まあ、ひとまず華琳様に報告だ」

「了解」

二人は資料を手に華琳が居る玉座に向かった。

――――

「なんなのこれは!!」
玉座に華琳の怒号が響いた。

それは、胡蝶達が華琳に資料を渡して華琳がそれを読んだ為である。

「秋蘭!!至急、これを書いた者呼びなさい!!」

「はっ!!」

それを言われた秋蘭は急いで玉座を出て行った。

「まったく、これを書いた者は何を考えているのかしら」

華琳は苛つきながら呟いた。

胡蝶はそれを見てある事を思い出して、少し間を置いて華琳に言った。

「まあ、落ち着け。そんなに苛ついていると……」

「何？」

「いや、何でもない」

「なんでも無くないから言ったのでしよう。なら、言いなさい。私は齒切れの悪い者は嫌いよ」

威圧しながら胡蝶を睨むと、

「か………」

「か？」

「か………可愛い顔が台無し。だぞ………」

胡蝶は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言った。

「……………。ぷっ！ふははははは！！」

すると胡蝶の恥ずかしそうな姿を見た華琳は笑いだした。

「……………／＼／＼、わ、笑うな！」

「ふふふ………。それは無理よ。あなたの恥ずかしがる顔なんて見た事ないんだから」

赤くなった顔で睨みながら呻いていると、秋蘭が戻って来て春蘭と見知らぬ少女を連れてきた。

「華琳様。資料を書いた者を連れてきました。ん、白井。どうして顔を赤くしているんだ？」

「聞くな……。聞かないでくれ」

胡蝶はまだ赤い顔を秋蘭に見せまいと顔を背けながら言った。

「……………、一刀の奴いつか殺す」

「一刀？誰だそれは？」

「ただの女たらしだ。忘れろ」

そんな事をしてしていると、さっき来た少女が華琳の前で跪いていた。

「あなた、名前は？」

「はい、私の名は旬イク。真名は桂花と言います。曹操様」

「ふふ、いきなり真名を授けるなんて変わった子ね。それで桂花。あなたがこの資料を書いたのね」

そう言っただけ資料を手にとって桂花に言った。

「はい。私が書きました」

「そう。なら、説明しなさい。何故、兵糧が前に決めていた量より半年の量しか用意しなかった事を！」

華琳は覇気を放ちながら桂花に向かって言った。

その覇気に当てられ桂花は怯え、胡蝶達は体をビクつかせた。

今回問題になっている資料には、明日行く盗賊討伐の兵糧について書いている。

だが、その資料には、最初に決めていた量より半分の量しか書いていないのだ。

「さあ、桂花。何故兵糧の量が半分しか用意しなかった言いなさい」
華琳はいまだに覇気を放っていた。

すると桂花は覇気に慣れたのか深呼吸をして華琳の方を向いた。

「はい、兵糧をへらしたのは理由はその量で盗賊達を討伐出来るからです」

桂花の言葉を聞いて華琳は少し興味を持った笑みを浮かべたが……

「貴様、何を言っている。そんな事が出来るわけがなからう!!」

それを聞いた春蘭は桂花につっかかるように言った。

「ふん！いきなり否定して、夏侯頓將軍は考える事が出来ないの」

「な、なんだと!!」

挑発に乗った春蘭は腰の剣に手を掛けようとしたが、胡蝶と秋蘭がすかさず止めに入った。

「落ち着け春蘭。何もいきなり切りかかるのは駄目だろ」

「白井の言うとおりでぞ姉者。少し落ち着け」

二人に言われて春蘭はしぶしぶ剣を引いた。

それを見計らい華琳は桂花に問いかけた。

「騒ぎも収まった所で、桂花。さっき言っていたあの量で討伐出来るとはどうゆう事」

「はい。私めに策がございます」

華琳の問いに桂花は自信あるように言った。

それを見て、華琳は何かを感じたか玉座から立ち上がり桂花に近づいた。

「桂花。そんなに自信があるなら、その策やってみなさい」

「はい、ありがとうございます！」

「けど、もし失敗したら覚悟は良いわね」

「はい、ご安心して下さい。必ずや盗賊を討伐して見せましょう」

そう言って桂花は玉座から出て行った。

桂花が出て行ったのを見て秋蘭が華琳に質問した。

「良かったのですか華琳様？あんな事を言つて」

「ふふふ。良いのよ、もし良ければ配下にするし、もし悪ければ罰する。それだけよ」

華琳はそう言つて胡蝶に近づいた。

「胡蝶。前にあなたが言つていた物、出来たかしら」

「ああ、一応は。鍛冶屋の人達が何丁か出来上がっているといつていたから明日の討伐には使える筈だ」

「そう、なら良いわ。皆の者！明日は盗賊の討伐だ！明日の為にのおの鍛錬を怠るな！」

「「「はっ！」「」」

華琳の号令で胡蝶達は解散した。

—————

華琳達と解散して、胡蝶は町の鍛冶屋に向かっていた。

「ごめんください」

「おお！御使い様じゃないですか！てめえら御使い様が来なさつたぞ！」

鍛冶屋に着くと、入り口で蔽つた男が胡蝶を見るや鍛冶屋にいた男達全員に叫んだ。

「お、お頭さん。落ち着いて下さい。今日は頼んでいた物を受け取りに……」

「おお！『アレ』ですか。おい頼まれた『アレ』と茶菓子持ってこい！！」

「はい！！」

男の声に近くの少年が反応して急いで奥に走っていった。

男はこの鍛冶屋の店長で、みんなからお頭と呼ばれている。

性格は頑固親父そのものだが、胡蝶の謙虚さに惚れてこんなふうに接している。

お頭がこう接していることで鍛冶屋の鍛冶職人、並びに町の人達は胡蝶に友好的に接するようになった。

「御使い様、頼まれた物を持って来ました」

すると奥に行っていた少年が布に巻かれた物を持ってきた。

「おい！なんで全部持ってこねえんだ！！」

「無理だよお頭！俺一人で全部は持てないよ」

「持てないって決めつけんな！！そんなんじゃ一人前の鍛冶職人になれねえぞ！！」

お頭と少年の口げんかを見て胡蝶は慌てて止めに入った。

「お、落ち着いて下さい。ほら、『アレ』は少年一人じ持てませんし、後で兵達に運ばせますから」

「ああ、そうですか。すみません見苦しい所見せちまって」

「いえいえ、そんな」

胡蝶は手を振って慌てて言った。

胡蝶は正直言ってお頭みたいなのは苦手なのだ。

今まで一人だった胡蝶は人とのコミュニケーションが大変下手でさつき華琳に言った慰めも一刀が前に言ったのを真似したのだ。

そんな胡蝶がお頭みたいに積極的に接してくる人に対応出来る筈も無くこんな風になってしまうのだ。

「そ、そうだ！お頭さん。これ試しましたか」

少年から受け取り胡蝶はお頭に聞いた。

「ああ、試したよ。御使い様はすげえよ。こんな物を知ってたんだからよ」

そう言ってお頭は胡蝶の背中を叩いた。

「痛い！痛いですよ」

「がははははは！」

胡蝶の声はお頭に届かず、お頭は背中を叩き続けた。

そして、時間は過ぎ明日は盗賊討伐。

桂花が言っていた策とは何か。

そして、『アレ』とは。

それは明日、全ては分かる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3685k/>

真・恋姫†無双～胡蝶の夢～

2010年10月8日14時16分発行